赤羽御坊

赤羽別院報 第10号

発行所：真宗大谷派
赤羽別院　親宣寺
発行人：野々山 洟美
愛知県幡豆郡一色町
赤羽上郷中14
Tel.Fax.(0563)72－2308
印　刷：㈱エムアイシーグループ

別院散策

別院の庫裡裏側にある墓地の北東寄りに、他と少し趣の異なる墓が二基存在する。本目家の墓、すなわち江戸の旗本、本目勝左衛門尉親宣（ほんめしょうざえもんのじょうちかのぶ）夫妻と両親の墓である。

岡崎上六名村生まれの親宣は、西尾藩主より赤羽の本願寺道場跡地を与えられ、菩提寺を建立、翌元禄十四年東本願寺第十七代真如上人より「本目山親宣寺」の号を賜った。三年後の宝永元（一七〇四）年江戸にて六十八歳の生涯を閉じた。墓碑銘には「信楽院殿釋了恵大法士」とある。

九十余年後の寛政十（一七九八）年、正式に東本願寺別院となって、「赤羽別院」と称され、今日に至っている。赤羽別院親宣寺と称する所以である。

赤羽別院関係の法要案内

六月六日　殉教記念法要
八月十九・二十日　暁天講座
九月二十日～二十六日　秋季彼岸法要
十一月十四日～十六日　報恩講
一月一日　修正会
一月十四・十五日　双全講
三月十八日～二十四日　春季彼岸法要
四月十一・十二日　報徳会と蓮師会
毎月十三日と二十八日朝　両度命日
毎月一回　真宗講座

赤色赤光

立春を間近にした寒い朝の一時／目覚ましが鳴る／目が覚める。目が覚めてみれば、息をしていた／生かされていた。一時も休むことなく、動き続けていた心臓が、働いていてくれた事に気がつく／おどろき、御恩を喜びつつ梵鐘を打つ／ああ、今日の始まり、朝の勤行／おあさじに会う人々の顔と顔／ご苦労様と感謝感激／自分のこととは云いながら／毎日続けることの尊さ、厳しさに頭が下がる思いです／勤めとは言いながら、励ましあう人々の心意気／大変ご苦労様で、有難い有難いおあさじ会の皆様／ようこそようこそと口から出てしまう／御法の悦びがなければ／怠けてしまう、休んでしまう／人間だもの、生きて生かされているもの、おろかさを／見てござる、見てござる

「この世は私と仏と逢うところ」という人がある。それは相田みつをの詞である。（大橋徳城）

第九組のページ

人間が人間であるために

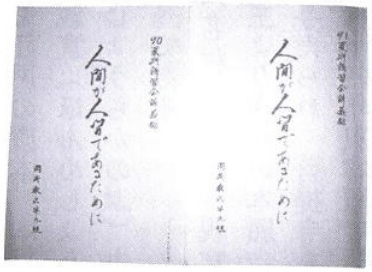
夏期講習会とは？

岡崎教区第九組（吉良町・幡豆町の真宗大谷派の寺院で構成）が開催する年中行事の中で最も大きな教化事業が夏期講習会であります。

現代に生きる我々の共通の課題、テーマを私たち第九組のテーマとして、毎年組内各寺が廻り番で会場となり、平生ではなかなかお越しいただけない名師をお招きして、寺族・門徒がともに法を聴聞するという形態で、戦前から続けられてきました。

平成二年度から『人間が人間であるために・いのちは誰のものか』というテーマに絞って、より現代の諸問題に近づいてみようということになり、宗教界だけでなく広く社会の各方面で活躍なさってみえる先生方にも来ていただき、ご教示を願おうということになりました。

この講義録は我々の今後の学習の糧にするために作成しましたが、縁あって目にとまった方々の人生生活の中で、仏法を味わっていただきたく機会になればと思い、出版いたしました。



我々は「仏教」をどう捉えているのか。「人生の後始末」と捉えてはいないだろうか。そこを真宗学者である平野師に尋ねてみますと、

この世の後始末は誰がするかというと、『阿弥陀如来』にお願いする。こういう有様に我々なっていて、それが娑婆というもんだ、これが人間の生活というもんだと、いうふうにしてしまっている。

そういうことに対して、親鸞聖人がおっしゃられたのは、この世に生きようと思うならば、浄土がハッキリしなければならない。浄土は決して後始末の場所ではない。こういうふうにおっしゃっていて下さると思うんですね。

（一九九〇年八月　夏季講習会講義録『この世に生きんと欲う』平野　修より）

九組夏期講習会のテーマである「いのちはだれのものか」という問いに対し、真宗学者田代師は一貫して死の問題を考えつつ応えてくださいました。

生老病死の苦悩、これは二千数百年前の釈尊の課題ですけれども、そっくりそのまま、現代の私たちの課題でもあるわけです。

いま、高齢者社会のなかで、老いをどう超え、どう考えてゆくのか。あるいは、病いをどう引き受けてゆくのか、死をどう引き受けてゆくのか、死をどう受け止めてゆくのか。末期ガンの人達がそれこそ差し迫った死を、どう受け止めてゆくのかということは、まったく仏教の出発点、釈尊が抱かれた課題そのものが現代の私達の課題でもあるということです。

（一九九一年八月　夏期講習会講義録『親鸞に聞く』田代　俊孝より）

第九組では講義録のバックナンバーを若干保管しております。ご希望の方は実費にてお譲りいたします。ただし年によっては既にないものもございますのであらかじめお問い合せ下さい。

（文責　大溪昌寛）

平成17年度夏季講習会ご案内

日時： 平成17年8月19日(金)・20日(土)

場所： 正覚寺（吉良町吉田）

講師： 19日(金) 正木　晃師（早稲田大学・慶応義塾大学非常勤講師）
20日(土) 田代　俊孝師（同朋大学大学院教授）

参加： 無料

お問い合せ先： 正覚寺
0563-32-0260

第十組のページ

本山瓦ものがたり
―明治時代の偉業―

(1)志貴野の風土編

京都東本願寺では、平成二十三年厳修の宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要にむけて御影堂屋根替え工事が始まった。実はこれらの瓦は、今から凡そ一二〇年程前に現在の西尾市志貴野町でつくられたものである。一枚ずつ丁寧に下ろされる瓦に、今尚残る先輩の篤き想いを確かめながらその歴史を訪ねていきたい。

■篤き想い

明治十三年七月二十一日、開導新聞は「三河国の同行より東派本山の両堂御再建に用ゆる瓦を残らず寄付致したい」と一報を報じた。明治十二年、両堂再建発示をうけての三河門徒の篤き申し出であった。その瓦の工作場が現在の志貴野町に決定していったのである。

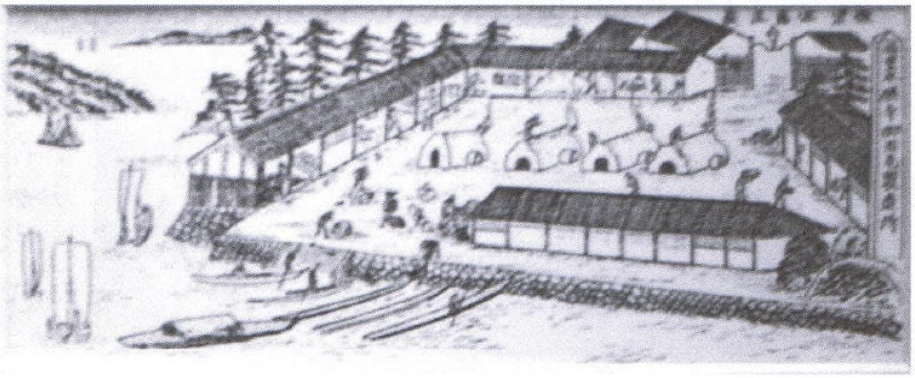
■志貴野の風土

志貴野は西尾市の北部に位置し、北に矢作川、東に矢作古川が流れており、矢作川と矢作古川の分流点の南部に位置する。志貴野は碧海台地にあって、その南には八ツ面山、大郷山、小島、浅井の山々がある。雲母を含む固い地質の山に遮られるように泥炭土、黒泥土などの粘土層が北側一面に広がっている。この粘土質の土は瓦をつくる原料として良質のものであった。

悠久の昔は一筋の河川であった。矢作古川がそれである。度重なる河川の氾濫を憂慮して一六〇五年、徳川家康は碧海郡木戸村から米津村にかけて矢作川の開削を行い、川は二筋に分かれた（徳川実記）。川沿いの地である志貴野は船を使って重い粘土や瓦、薪などの燃料の運搬等に大変適していた。また、広い村に人口も少なかったため、製瓦場を置く土地の確保ができ、工作場設置の条件が整っていった。

■古新田村の開拓

志貴野の歴史について少しふれてみたい。一六六五年、幡豆郡西浅井村の畔柳甚五兵衛により古新田村が開拓され、一七六七年には碧海郡福桶村の鈴木九右衛門の手によって新々田村が開拓された。以来、明治初期の政策により明治十七年七月二十六日、古新田村、新々田村、藤井村出崎が合併し、碧海郡から幡豆郡へと編入されていった。また同年八月四日往時の荘園名、志貴庄に因んで志貴野村となる。この頃、志貴野村では製瓦作業の真っ只中であった。



「本山御用瓦工作支場絵図」　参陽商工便覧より

■門徒の後押し

三河門徒の強力な後押しを得る中で、西尾市唯法寺住職の占部公順（観順の息男）が中心となって募財等に奔走したことが大きな動きを生みだしていったことを忘れてはならない。

（文責　三村謙作）

第十組行事紹介

●同朋の集い

講師　厳西寺住職　藤原　肇師

テーマ　「両堂再建と志貴野製瓦場について続編」

展示物　瓦の木型など

日時　四月十六日(土)午後二時

会場　志籠谷　蓮正寺

第十三組のページ

門徒会座談レポート①

『日頃お寺に対して思っていること』

▼若い世代にも教えを伝えていこうと思うのなら、現代の言葉に置き換えていかないと、いけないんじゃないかなあ。

▼せめて、今風の言葉で言えばこういう事だと言ってくれれば、自分の生活に置き換えて考えることだってできるんじゃないかな。

▼やはり時代にあった工夫がほしいね。

▼お説教などでよくあるんだが、同じ漢字でも読み方が違うよね。それだけでもう、とても難しく感じてしまうよ。

▼それでも、例え話をはさんでもらうと、俄然わかりやすくなるんだが。

▼そうだよ。その時々に合わせて、生々しく語られていく必要があるんだと思うけど。そうしないと、三十代四十代の人たちが、お寺と関わる場合、本当に何にもわからんということになってしまうよ。だって、われわれの世代でもよう解らんという人が多いんだから。

▼しかしね、あんまり合わせてばかりいると、見方がどんどん狭くなってしまわないかい。たとえば檀那寺だけあれば本山なんかいらんと言う人なんかが出てきてしまったら、これは大変なことだよ。

▼話は違うが、お参りで、法事などは子どもも一緒に参っているけど、祥月や常斎だと子どもがお参りしていないね。

▼一緒にお勤めをすることが本当は一番大事じゃあないだろうか。

▼若い人にも通用するような事を考えてもらわんと、仏教全体が衰退してしまうよ。それでなくても、訳のわからん新興宗教がたくさん出てきているんだから。

▼確かに説教は難しい話が多いけど、それでもとても心に響く話もあるんだから、できるだけお寺に行くようにしたいね。

■レポーターの視点

お経やお説教をわかりやすくしてほしいという意見が多いのは、生きていく上で、仏教というものと、自分自身がどう関わっているのだろうかという関心が、とても強いからであろう。あわせて、同朋とか同行という意味を、いま一度考えていけたらと思う。

■レポーターの感想

門徒会の座談会をレポートさせて頂きました。皆さん仏教というものの将来を真剣に考えていてくださるんだなと思いました。お寺も今回の話しなどから色々な努力をしていかないといけないと思いました。共に真宗の教えを信じていく一人として、今後の座談会にも参加していきたいと思います。

（文責　伴　仁志）

第十三組（一色）の教化事業

●四月五～六日（一泊二日）
本山収骨団参　申込各寺へ

●壮年の集い
第一回　四月二十二日(金)
第二回　五月二十日(金)
ともに夜七時三十分
講師―堀田　護師
会場―赤羽別院（一色町）

第十四組のページ

シリーズ 親友（しんゆう）

心の元気塾で出遇った仲間たち

第一回　山本治雄さん

自動車部品設計者、四〇歳。心の元気塾「推進員養成講座」に参加（一九九五年と二〇〇四年）

―初めての上山奉仕の時、随分悩みながら「帰敬式」を受けられたことを覚えているのですが。

とにかく帰敬式を受けたら、抜けられなくなるというか、この仏教界に入っちゃうというのがあって。自分が染まっちゃうというか。

―染まる？

あの時は、オウム真理教が注目されていた頃で、変な意味、洗脳されるんじゃないかという思いと、もう一つは、自分が真宗という一つの考えに入っていいのかなというのがあって。その点、踏ん切りがついていなかった。

向かって一番左が山本さん

―踏ん切りがつかない段階で帰敬式を受けちゃったの？

うん。しちゃった（笑）。「受ける」って言っちゃってから、待てよと。まだ真宗って何も知らないし、こんな状態で親鸞さんがもしいたら、「もうちょっと、考えがまとまってから受けなさい」と、言われるような気持ちがあったのね。

帰敬式を受けるということは、要は法名をもらって仏弟子になるということでしょう。自分がまだしっかりしてないのに受けていいのかなという思いが強かったんだよね。

―実際に受けてみた感想は？

御真影の前に座って、おかみそりをしてくれる人が後ろから、シャッ、シャッと、やってくれた時に、何か、もやもやっとしていた霧がパッと晴れたようなというか、気が楽になったというか。

で、「釋心念」と書いてあって。自分が念仏というのを嫌って、ようわからんままやってるから、これはまた、すごい法名を貰っちゃったなと。

―そこから出発するような感じかな？

そうだね、本当に「あっ、スタートだ」と思って。帰敬式を受けたらお終いというか、ゴールみたいに思ってたんだけど。逆に、仏門に入るんだから、わからなくて当たり前かと。

仏弟子になったから、それこそ親鸞さんに怠けてるって言われちゃいかんというか、聞いていかんならんという気持ちになった。

―聞法の場に出たいという、前向きな気持ちだね。

やっぱり、法名がなかったら、仏弟子じゃないということだから、怠けてもいいかと、思っちゃたりするんだけど。法名をもらって、「やらなくっちゃ」という気になったよね。

―一緒に受けた仲間がいるというのは大きいよね？

そうだね。これは、この間の講座で、荒山淳先生から聞いて、とても印象に残ってるんだけど、「一緒に聞く友がいる」っていう言葉。あれが何か、うれしいというか。

―本当に、そのことが実感できたよね。

〔二〇〇五・一・一五〕

（文責　安藤智彦）

輪番室

二年間休刊していましたが『赤羽御坊』を再び刊行することができました。この度は、各組から編集委員を選出していただき、地域の活動を通して、少しでも課題の共有ができるように配慮しての紙面作成となりました。是非とも味読戴き、ご意見をお寄せ下さい。

さて、御承知のように赤羽別院は江戸時代に別院となりました。明治になって、本山の旗振りで岡崎に三河別院を建立して、赤羽別院と暮戸教会（岡崎市矢作町）を合して三河一円の別院とするという計画がありました。赤羽別院は歴史もあり、また当時は大変賑わった別院でもありましたから、赤羽別院の廃寺には大反発や反対運動が頻発しました。本山当局は地元の門徒や、地域の僧侶の要望を受け入れ、並列の別院として、存続を認めました。但し、御崇敬は一方の別院のみというものではなく、同じように二つの別院をご崇敬するというもので、三河別院は三河一円（後に東三河は分離する）を崇敬区域と定め、赤羽別院の崇敬区域は八組から十五組（現在の幡豆郡、西尾市、碧南市、安城市南部、高浜市）と決められました。その後、紆余曲折はあったものの、制度上は現在も変更されずに今日に至っています。（図）

今、教区や宗門では別院や寺院の存在意義及び役割等が論議されています。その議論の推移を見守りたいと思いますが、別院内部においても、二十一世紀にふさわしい別院像を模索することが急務と考えます。

赤羽別院の崇敬区域

輪番を拝命して、十年の歳月が経過し、地域の教化センターとして、地域の真宗ネットワークの拠点として、赤羽別院が果たさなければならない課題は山積しています。別院の衰退は、教団の衰退を意味します。寺院の存在感の低下は、お念仏の教えの伝播へのブレーキになります。皆さんの別院「御坊さん」として、親しく足を運んでいただける別院を目指して、緊張感をもって取り組んでまいりたいと思っています。

（赤羽別院輪番　野々山 洙美）

Q&Aのコーナー

Q　この頃お墓などに造花を見ますが、いけないのでしょうか。お花の少ないときなどでも、立派に立てられて安上がりでいいと思うのですが・・・。

A　結論から言いますと、使わないで下さい。それにはいくつかの理由があります。第一に生命あるものをお供えすることに意味があります。生命と真向かいになり、同時に慈しむ心が大切です。

ところで誰の目を意識しているのですか。格好だけ気にして、お粗末な中味が透けて見えてきます。そして悪く言えば、仏様を誤魔化すことになりませんか。敬いとは、ひたむきな心から生ずるのではないでしょうか。ささやかでも、それが本当に精一杯であるならば、良いではないですか。

編集後記

編集スタッフの解散により、二年有余の休刊を余儀なくされましたが、このたび各組の御協力によって、再刊することができました▼紙面構成を変えたことにより、あらためて題字も替えました。揮毫は第九号までと同じく、第十組明泉寺前坊守御舘信子さんにお願いしました▼Q&Aのコーナーも設けました。聞きたいことがありましたら、別院へ御一報下さい▼さらに各組からのメッセージを増やして行きますので、御期待下さい。